

景観づくりにおける水平的協働



難波 喬司
論説委員
静岡県副知事

2005年、都市、農村漁村等の良好な景観形成を促進するための法律「景観法」が施行された。景観行政団体（都道府県、市町村）が景観計画を策定し、景観計画区域内の建築物等の形態意匠に制限をかけられるようになった点で画期的である。施行から13年。この法律により、景観形成は進んだのだろうか。答えは地域により異なろう。景観づくりは長い時間を要するものであるが、短期間で目に見えて変わってきたところもあるものの、何も変わっていないところの方が多いのではないだろうか。それはなぜだろうか。

その理由の一つとして、景観づくりに関する、日本人の次のような行動・生活様式が影響していると考えられる。

- ・部分最適・短期的最適が得意。全体最適・中長期的最適は苦手
- ・景観等の公共の主観的価値優先のために私権（土地の使用、建物の外観など）に強い規制をかけることに高い価値を置かない
- ・このため、自分の身の回りや個々の建物を美しくするが、長い時間をかけて、個人的不都合を受忍し、多数の協力・参画のもと（地域ぐるみで）計画的に美しい風景や住みやすい町を造るといふ歴史が乏しく、意識も一般に希薄である

このため、“景観計画”に目指す姿を描いても、首長等が強い思いを持って住民に語りかけ取り組んでいないところでは社会の協力が得られにくく、景観づくりはなかなか進まない。

これに対し、日本の農山村景観は美しいではないかとの反論がある。しかし、この景観は、意識・意図してつくられたものは少なく、自然と調和した暮らし方という文化のもとに“無意識に”つくられた景観が多い（川勝平太氏がいう“無自覚の美の文明”）。

現代社会では、自然に対し、元は自然界になかった素材を用いた大きな人為的改変が進んできた。そこでは、意識して美しい景観をつくっていく必要がある。その際には、上述の日本人の行動・生活様式を考慮し、法律などによる「計画」や「規則」という外的変革の社会システム（社会の仕組み）とともに、意識、心の持ち方という、人々の内面に働きかけ、行動変化を促すことができる社会システムが必要である。静岡県内の事例をもとに、このシステムについて考えてみたい。

事例1：清水港－

1991年、官民で構成する「清水港・みなと色彩計画策定委員会」が「清水港・みなと色彩計画」を策定した。民間企業の協力により、臨港地区内の施設はクリアブルーとホワイトを基調とした色彩に彩られ、富士山と海と港湾施設が融合する他に類を見ない景観を形成している。ここには、法律に基づく規制ではなく、「美しい港の景観をつくろう」という共通意識のもと、港の関係者間で合意した「色彩計画」に基づき、民間事業者が自ら費用負担し、建築物の色彩を管理し、美しい景観という価値を共創していく社会システムがある。「公による規制」ではなく、“目指す姿に共鳴する人々による民主導の価値共創”の事例と言える。

事例2：伊豆半島－

東京2020五輪の自転車競技の開催が迫る伊豆半島では、来訪者に誇れる美しい景観づくりを地域ぐるみで進めており、その一つが美しい沿道景観形成のための野立看板の撤去である。

野立看板を立てたいと思う人の協力が得られなければ、規制を加えても、是正命令－無視－強制撤去－再設置というイタチごっこになる。撤去の必要性について、広告主を含む社会の共通認識とする必要があった。様々な関係者（県、13市町、観光関係者等）をメンバーとする「伊豆半島景観協議会」を組織した。協議会での議論を踏まえ、来訪者が多い幹線道路沿いの規制を強化することとし、2017年11月、静岡県屋外広告物条例を改正し、伊豆半島地域の幹線道路沿いを、屋外広告物を原則として設置できない地域に指定した。条例違反の野立看板2,200件について、東京五輪の開催までに撤去を完了するとし、協議会で進捗管理を行いながら徹底した是正に取り組んでいる。

こうした取組の趣旨が地域に浸透するよう、優れた広告物の表彰やまち歩きイベント等の住民参加型のキャンペーンを実施し、目指すべき姿の共有とその実現への参加意識の醸成に努めている。この結果、2,200件のうち、是正指導開始から半年後の2018年6月末で414件の是正（撤去又は改修）が完了した。ほとんどは設置者による自主的是正である。2019年度末で全ての違反広告物を是正する予定である。

景観づくりには、公的規制による強制だけではなく、地域ぐるみ、社会総がかりの“協働”が求められる。協働には垂直的協働（官の策定した計画や施策に民が協働する）と、水平的協働（計画段階から官民が協力し、その実現に対等な立場で協働する）がある。清水港と伊豆半島の事例は、形は異なるものの水平的協働の事例であり、そこにはうまくいくための社会システムが存在する。

参考文献(1) 川勝平太：文化力 日本の底力、ウェッジ、2006年